



Title	近代ヘネラリーフェ修復における植物の使用法及びランドスケープとの相関性
Author(s)	佐藤, 紗良
Citation	デザイン理論. 2021, 77, p. 88-89
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78327
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

近代ヘネラリーフェ修復における植物の使用法及びランドスケープとの相関性

佐藤 紗良 日本学術振興会特別研究員 東京大学

はじめに

南スペインのグラナダに位置するアルハンブラ宮殿は 13 世紀ナスル朝時代から続く城塞都市である。豊かな水と植物で構成されたパティオを持つ離宮、ヘネラリーフェは、1921 年に国の保有物としてアルハンブラに統合された後、国家的な修復・保存が開始された。

大規模にヘネラリーフェ修復に介入した最初の修復責任者はレオポルド・トーレス・バルバス (Leopoldo Torres Balbás, 1888-1960) であった。トーレス・バルバスは歴史的建造物の保存というアプローチをスペイン国内の修復界にもたらした人物である。彼は都市計画的な視点を持ちつつ、庭園修復においては植物を巧みに利用した修復を行った。

ヘネラリーフェは丘陵に位置する様々な建築様式の複合体であるため、修復家にとって都市計画やランドスケープの研究は必須であった。しかしトーレス・バルバスのランドスケープ観と庭園修復との相関性を詳細に分析した先行研究は僅少である。本発表ではトーレス・バルバスの修復理論、ヘネラリーフェにおける実践、ランドスケープ観を考察し、彼のランドスケープ観が庭園修復にいかに関与したのか明らかにすることを試みる。

1. トーレス・バルバスの修復観

トーレス・バルバスは「折衷主義と柔軟性」というモットーを掲げ、アルハンブラにおける全般的な修復理念を以下のように明示する。(1) 歴史的建造物を尊重し、なるべく手を入れず保存に力

を入れる、(2) 遠くからは統一性が取れているように見えつつも、近くからは修復後とそれ以前の状態を判別可能にする、(3) 建物の耐久性・考古学的関心・芸術的側面を尊重しつつ、その場所や破損具合に相応しい修復態度・方法をとる。

歴史的な様相を絶対としつつ、建物の耐久性・考古学的関心・芸術的側面全てをも重視しようとしたことによって、彼の修復尺度は必然的に柔軟なものとならざるを得なかった。こうした柔軟、もしくは曖昧とも言える修復態度は、彼の庭園修復にも影響を与えている。

2. ヘネラリーフェの庭園における修復

植物学研究者 J・ティト・ローホに従ってトーレス・バルバスの植物の利用法を三種類に分けると、以下のように分析できる。

①建築物の代替品：市街道路として作られ一時期荒廃していたイトスギの散歩道は、1932 年頃トーレス・バルバスによって道路システムの一部が回復された。トーレス・バルバスは道の両側にイトスギを植えたが、このイトスギはパーティションとしてだけでなく、街路に沿って立ち並ぶ建物のファサードを想起させる装置としても機能した。これは新たに建築物を建てずに、植物で過去の様相を取り戻そうとする試みでもあり、修復空間の新旧の判別を可能にした。

②装飾：当初果樹園であった新庭園は、現在はヘネラリーフェへの入口でもある。トーレス・バルバスは当時のグラナダ庭園を再解釈し、その庭園要素を引用して 1931 年に新庭園を造園した。そ

れは結果的に新しいグラナダ庭園を生み出すこととなった。

③植物の「修復」：トーレス・バルバスは過去の文書を分析し、地域的・歴史的に存在しなかったと考えられる付加物を取り除いたり、より信頼できる形態の代替物と置き換える修復も試みている。例えば1934年、ヘネラリーフェのメインパティオであるアセキアのパティオで、イトスギのボックス形アーチを中央水路に沿って並べるように植えた。このアーチは1890年以前にパティオが持っていたイメージを取り戻すものだったが、厳密には過去に存在しなかった形態でもあった。彼は修復という名目で庭園に新しい構成要素を取り込んだのである。

以上三庭園からトーレス・バルバスの植物の利用法を考察したが、彼は修復の全般的方針の、特に「考古学的関心・芸術的側面」を重視していたと考えられる。いずれの場合にも過去に存在しなかった新しい庭園を作った点は看過できないが、トーレス・バルバスは自身の修復尺度にしたがって、建築物の代替品としては芸術的側面と考古学的関心、装飾では芸術的側面、そして植物の修復においては考古学的背景を意識していたと言える。

3. トーレス・バルバスのランドスケープ観

ここではトーレス・バルバスがアルハンブラ修復に携わっていた14年間（1923-1936年）の彼の著作から、ランドスケープや都市計画に関係する箇所を抽出する。まず、彼は都市計画に关する文章の中で国民精神とその歴史、建築や風景とのかかわりについて言及している。また、生活や芸術と結びつくモニュメントの維持を勧めたり、建築は地理的条件、人間生活に影響されつつ、自然と接触して発達すると述べる。こうした記述は考古学的・芸術的側面の重視につながると考えられる。

また都市計画を考えるにあたり「核」という言

葉を使用し、古い都市の保存の推奨とその記念碑性に話をつなげる。そして現在のニーズに応えつつ古い核は壊さずにその外側に都市を広げることの重要性を語る。この言説はアルハンブラ宮殿を核として周辺に近代都市が作られていったグラナダの街並みと重なる。こうした都市的ランドスケープとモニュメントの同一視は歴史的建造物の尊重や建物の耐久性・考古学的関心・芸術的側面ともかかわっている。

トーレス・バルバスのランドスケープ観の帰着点は基本的に人間、そして都市計画とその記念碑性とかかわっており、モニュメンタルな都市を保存すべきであるという姿勢が貫かれている。またモニュメントとピクチャレスクという語が対になって登場し、考古学的側面と芸術的側面の重要性が説かれる。

以上のことを端的に換言するならば、トーレス・バルバスにとってランドスケープとは土地固有の人々の生活や国民精神を含んだモニュメンタルな都市のことで、ある意味で都市景観とも言えるものであったと考えられる。彼にとってはヘネラリーフェ自体がランドスケープの一種であり、このモニュメントを喪失しないよう、つまりグラナダの人々の精神が失われないよう、考古学的・芸術的側面から庭園修復を行ったと言える。

おわりに

ランドスケープはその土地の環境や文化、地理的特質を表す一種のモニュメントであり、集合的記憶や市民生活に大きく影響する。それはヘネラリーフェにおいて今も昔も重要なアイデンティティの一つである。トーレス・バルバスは、ヘネラリーフェはランドスケープそのものであり、グラナダ市民の精神を表すものでもあったと考えた。彼にとって、土地固有のもの全てがモニュメントを生み出し、そしてそのモニュメントとは都市全体、ランドスケープそのものであり、それを取り巻く人々だったのである。